

純鳥談  
傳奇  
卷之二  
神代

~13  
4391  
2



鳥傳奇桃花流水卷之二

江戸 山東京山編次

第四齣 卧劍

茲にまゝ山中左衛門やまなかざゑもんの一子いちご三之助さんのおすけと松島まつしまにさうと其日そのひも暮くれをじらら  
 我家へ飯いひをかいの木きの敷ぬきにもぐりて病人やまなかの如ごとくあれが常つねの寢所しんじょへ  
 つきて小君侍女こきみじにいら等らに介抱かいわうさせ家来けらい春瀬はるせ由良ゆら之進のしんとめりしに  
 ことも悲歎ひいんの涙なみだに目めとすりあがりて出来できる山中左衛門やまなかざゑもん由良ゆら之進のしんは  
 詞ことばとゆへえんとせしりし木きの介抱かいわうとあり居ゐりし侍女じにいらのうら  
 歳とし久ひさくくわいつひ方かたの二人ふたりかゝこのひとまゝさうちやうわげつ  
 泣なみだりてをせり左衛門ざゑもんと見えかへにさうわつ額ひたいとあせく顔かほは  
 袖そでとあわひ音こゑとさうのりて泣なみだり左衛門ざゑもん泣なみだじとまきて誰たれもやと顔かほは



此兩人あまをわかれハ木が身の上おがつくわくはぞとくづみは  
一人がりの今三之助君がつれりしの涉小袖のうらめしき  
袂より蒲公英の花のちぎらると木尻の安のいせゆことと昨日  
涉庭は遊びあひする。系いかしこれりのあらんこれと摘らうこそ  
見せぬが袂のうらふ貯へおたぬいとわがえぬ摘まざる蒲公英の  
花ぶれいまど枯果ゆぬにとるを三之助君の涉俣目乃先よ見ゆる  
やうにていしくわらうくわかれハ木君へいまききとあのが音にうえ  
うみてこにえせりせゆいと云々猶むせぬつてぞ泣くる山中左邊門是  
とまて腸もさけらぎるをわり又も悲歎にせまうくるが由良之進  
打對ひ汝とめりする夏別夏にわらむむの鷲へ必定志賀の山中  
住あるらんとる片時も早く彼山中にまけのむら鷲と射とめり

推見の儲と後一彼が死體の啼を焚されうらもわらやん尋ねるん  
ふありと多く其用意せよと今ト由良之進勇立とんうたわが  
ふの僕も涉供しとるん家奴どもの心剛ある奴原とおんこもさや  
松明あま貯りちて今宵一夜ハの山中に明しゆんあらん用意  
仕ん涉支度わらとと席とありをたぬ僕も斯と告りてそれがも  
茶らんわれがも涉供せんといひて家奴もあらんしく打拵て手くよ  
犬鎗とりちて夜中山路の猪狼とも追べき備とかりこきわき  
用意全くとりて山中左邊門に告ぐれを左邊門へ猪袋束とす  
替弓手鎗まをも持ちて由良之進ともい主従あも此人あま  
路といもたて初更のころわの志賀の山よりつるわまの僕も明  
あつて山よりけのむら谷とけり峯とこえりかき巡りて

月の光に梢とのぞき驚の行方三之助が死體とぞがれしにその  
 其有所知ぞ空しく時と移して夜も明もるれをせんをく麓  
 下り以山中に鷲やると里人よとぞねるにすて此邊の山くわ  
 鷲乃住の成すもあぶゆをそとらばはてまもくかもく形づ  
 いろのく打珍なるがすくそとて我家とぞとぞ飯りなるさく山中  
 左邊門家に飯りつぎに主人のわたりとて家にくるまわり  
 老なる奴僕わいさく門外にうり里の山中にわい昨日主人  
 の立此あひるあそ歩飯うり重き侍も兩人走来り山中のわさるや  
 君より火急の歩りことさもいゆしく宜ひゆなれもくぐのほと  
 中てよれ夏にゆや又わくやわんをかりありがくゆべとて家よ  
 あひらざるはしとせしに兩人の歩方ふりゆや私語のてあてひ

せましく支飯りあひらぐまぐくわりて又その人の人もあぬが来り  
 此度の御主人の行きたときふく尋ふ由良之進どのともうづゆ故  
 左邊門どの今宵由良之進と具く立そのゆが下ぎぬのそれしあれば  
 しくもありそととりゆにわの兩人かへ木君よとらんを案内も  
 あく打とわしがかへ木君がけりさるやと居取んとてあてその  
 仕らむ初もくといひは、打驚なるさぬにえゆよ侍女衆のやの  
 かの兩人の其終飯らまのと夏こまやふ告しと左邊門で心中に  
 あ中こつひゆにへて袴裳束と常の服にかえて由良之進よかへ  
 木が夏と心せよと命ト朝飯とあてりとり主人が火急の用と  
 つひ彼僕が物語ときて其縁故とさくがく昨夜の宵よりよ  
 むらざるのあそむ氏王殿の痲とるけしりゆ他國といひてりし

せきりしるが左藩門の志づうもあつど 彼槍丸の短刀にうてあのがれよ  
 あつる事とんほ也知ぞとやあつんやわつんと人のうへのあつつあ  
 側たがひの如く主人秋季あきの鼓つづみへいつりたるに 秋季直西左藩門と召出  
 發はつ據この爲ためにそとぞあつたー 彼槍丸ととりつづい。たるう下りて平伏  
 むせー 山中左門が前まへよあひやう 汝其短刀におおえありやとの詞ことばのい  
 つり立たたれつ 山中左藩門まろ不審ふしんくて短刀ととりわけ見るにおおえの  
 ある槍丸やぶりあれば 打撃うちうちよしく見るに 鮮あまく血ちの刃やいばと漆うるしとて紙かみ見みて  
 まをもく 驚おどろきさへ何なんゆゑにゆととづねたるに 秋季服息あきふくいきおーのけと  
 肘ひぢと張ひつ 山中と碓うしと睡ね眈めつ何なんゆゑとへ 横道よこみち者もの昨夜きのう地盤ぢばん坂さかの辺あたり  
 何者なんものととも志こころまど 其短刀と飛とせて 氏王うぢおう丸まるが 櫻さくら粘ねりのつらさありー 興きようへ  
 打付肩うちつけかた尖さへ手て痕あととあつせうり 其その一いつ刀たがの前まへの日ひ汝なんぢへよへー 槍丸やぶりまもつて  
 汝なんぢが所ところ為なるんしとやをりのおへー 言こと譯わけのりや返かへ答こたへせよりにくと気きと  
 つらして宣のたまへ 山中左藩門おそれ入いりて 平服へいふくるー 汗あせ証しるしいひのとも 譜うた代しろ重かさね恩おん  
 の侍主人さむらいしゅじんへ對たいししてまろるる大悪おほあくとあつるひの心こころ疾はやのののけりつるる  
 と半はんツツいへ 秋季頭あきかぶうらうりのあく 人心にんじんへもうりつらー 昨夜きのうの騷さわ動どう他た  
 聞きといひておかからにわくー あつらうりととども長臣ながぢんの才さいとてとてとも  
 おふさがるころのよもわじとるるに 昨夜きのう側たがひづひの侍さむらいともつらしてわー  
 じりしに 兩ふた方の使つかひとひあうなりて 家いへにわくざりしに 汝なんぢが心中こころに一物ひともの  
 あるゆゑとこそあつるつとておくづさう 覺悟かくごせよと宣のたまつてはと立て  
 侍佩刀さむらいばいとうに手てとつけあひれば 最前さいぜんより 障子しょうじのうげふ 寢居ねいのうら  
 花はなの方かたのうじくとをのぞかぬ 秋季あきとあし 榊さかき手て討うちと見えー 花  
 さるともあつるをいふ 汝なんぢのうけさをもひて 氏王うぢおう丸まるに疵きずつけーのの 誰たれも

せきりしるが左藩門の志づうもあつど 彼槍丸の短刀にうてあのがれよ  
 あつる事とんほ也知ぞとやあつんやわつんと人のうへのあつつあ  
 側たがひの如く主人秋季あきの鼓つづみへいつりたるに 秋季直西左藩門と召出  
 發はつ據この爲ためにそとぞあつたー 彼槍丸ととりつづい。たるう下りて平伏  
 むせー 山中左門が前まへよあひやう 汝其短刀におおえありやとの詞ことばのい  
 つり立たたれつ 山中左藩門まろ不審ふしんくて短刀ととりわけ見るにおおえの  
 ある槍丸やぶりあれば 打撃うちうちよしく見るに 鮮あまく血ちの刃やいばと漆うるしとて紙かみ見みて  
 まをもく 驚おどろきさへ何なんゆゑにゆととづねたるに 秋季服息あきふくいきおーのけと  
 肘ひぢと張ひつ 山中と碓うしと睡ね眈めつ何なんゆゑとへ 横道よこみち者もの昨夜きのう地盤ぢばん坂さかの辺あたり  
 何者なんものととも志こころまど 其短刀と飛とせて 氏王うぢおう丸まるが 櫻さくら粘ねりのつらさありー 興きようへ  
 打付肩うちつけかた尖さへ手て痕あととあつせうり 其その一いつ刀たがの前まへの日ひ汝なんぢへよへー 槍丸やぶりまもつて  
 汝なんぢが所ところ為なるんしとやをりのおへー 言こと譯わけのりや返かへ答こたへせよりにくと気きと  
 つらして宣のたまへ 山中左藩門おそれ入いりて 平服へいふくるー 汗あせ証しるしいひのとも 譜うた代しろ重かさね恩おん  
 の侍主人さむらいしゅじんへ對たいししてまろるる大悪おほあくとあつるひの心こころ疾はやのののけりつるる  
 と半はんツツいへ 秋季頭あきかぶうらうりのあく 人心にんじんへもうりつらー 昨夜きのうの騷さわ動どう他た  
 聞きといひておかからにわくー あつらうりととども長臣ながぢんの才さいとてとてとも  
 おふさがるころのよもわじとるるに 昨夜きのう側たがひづひの侍さむらいともつらしてわー  
 じりしに 兩ふた方の使つかひとひあうなりて 家いへにわくざりしに 汝なんぢが心中こころに一物ひともの  
 あるゆゑとこそあつるつとておくづさう 覺悟かくごせよと宣のたまつてはと立て  
 侍佩刀さむらいばいとうに手てとつけあひれば 最前さいぜんより 障子しょうじのうげふ 寢居ねいのうら  
 花はなの方かたのうじくとをのぞかぬ 秋季あきとあし 榊さかき手て討うちと見えー 花  
 さるともあつるをいふ 汝なんぢのうけさをもひて 氏王うぢおう丸まるに疵きずつけーのの 誰たれも

分明あつど雑見とくあふあふのりん、伴ひつて、途中ふとさうり  
のしと事不分明よな、まていひにもしらぬ、ひ左邊門とゆ、  
あつて氏王丸は疵一ののどめ、こく、あつて神がへく、まてさうり  
理の、詞に秋季打點頭て、この席に、色猶山中にむ、み、  
あふとくいひつ、が言譯わ、ば、せし宜へ、左邊門、ま、ら、に頭とあけ、  
短刀と前よ、お、此、鳩丸とて、氏王君へ、疵一、ゆ、お、に、ち、ら、んと、ゆ、さ、う、  
あふ、の、理、あ、つ、す、上、る、仔、細、一、と、り、す、の、あ、る、べ、君、も、あ、ら、  
め、せ、ゆ、ご、く、當、年、五、歳、に、あ、り、に、男、三、之、助、此、短、刀、と、見、ゆ、て、程、を、お、の、れ、  
指、料、と、く、ら、え、ま、ま、り、に、請、ひ、ゆ、お、に、子、に、甘、き、の、親、の、あ、ひ、ゆ、ゆ、賜、  
そ、ん、ど、あ、つ、か、ま、に、與、へ、て、他、出、の、む、れ、に、あ、つ、ど、帶、さ、ゆ、ひ、に、や、つ、か、  
も、昨、日、花、園、の、花、見、よ、ゆ、り、つ、る、が、此、の、方、若、君、も、あ、の、ら、之、法、藝、が、あ、ら、と

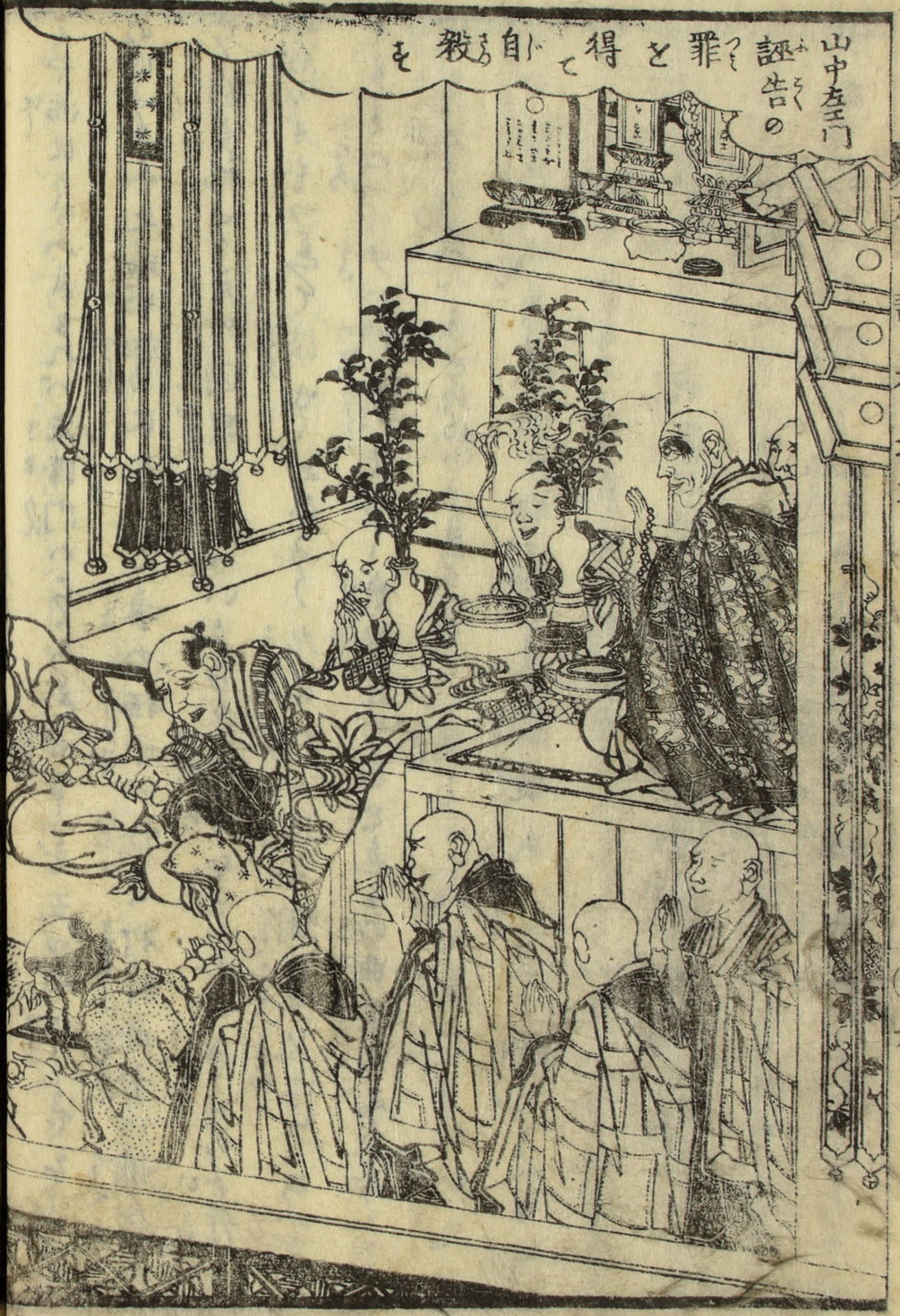
見、ゆ、け、ま、り、て、妻、子、と、具、し、て、君、と、あ、ま、し、野、に、さ、り、ゆ、り、ん、の、失、禮、と、存、  
花、そ、の、と、立、さ、う、志、賀、の、山、間、に、ゆ、り、て、祀、と、賞、て、時、と、う、つ、一、黄、昏、  
ら、く、あ、る、ま、に、飯、路、に、お、と、む、れ、ゆ、り、ん、と、あ、ひ、さ、ら、し、と、り、も、向、の、山、上、  
大、鵬、お、と、し、来、り、て、男、三、之、助、と、う、い、摺、雲、井、と、う、い、飛、さ、り、て、行、方、知、  
あ、り、ゆ、此、日、も、鳩、丸、い、れ、が、帶、し、と、り、ひ、ま、く、ゆ、て、鵬、に、さ、ら、ま、ゆ、一、定、  
腰、し、う、後、も、あ、れ、て、落、さ、と、人、の、ひ、ら、ひ、さ、り、て、氏、王、君、へ、此、短、刀、と、り、ゆ、  
つ、け、ゆ、し、と、と、お、げ、え、ゆ、さ、ら、ち、づ、れ、氏、王、君、と、害、し、と、ま、つ、ん、と、ゆ、  
い、も、せ、ま、君、し、う、さ、な、つ、り、さ、ら、此、短、刀、と、り、て、打、ゆ、け、ゆ、り、ん、さ、り、も、ま、  
昨、夜、宵、の、ち、づ、り、家、来、と、具、し、て、志、賀、の、山、中、へ、り、け、の、が、り、男、の、  
御、と、對、と、り、ゆ、し、と、夜、う、山、中、と、へ、り、づ、り、今、朝、家、に、飯、ゆ、お、に、御、  
い、も、應、せ、ど、氏、王、君、の、ゆ、い、ま、も、ゆ、ゆ、さ、ら、仔、細、に、ゆ、つ、と、あ、の、れ、と、野、馬、

むらぎらうとて曉一のけきせありとて其の仔細とありてふにひのびのふ  
 秋季これとまゝれて左衛門と打刃今一子と鶴鳥とさうさうの虚行  
 よのや大事の為出さる今や茶理あるは似されいまが今日いほつら  
 べ明日より日数三日ののどに氏王に疾つける曲者とあし捕て  
 引来べし。さるたよ於て汝が罪の逃さうとて自曉一辨べし。どくく  
 立とのつぬひつ席と遊うて奥殿へ入ぬいふれば花の方もあしふ  
 ちふみて席と立さる。かくて山中九條門のの鳩丸と食談のなる  
 請うけて家に飯り由良之進とめしめて其のやうを承すしうせ家の浮沈  
 にかつらまき一大事あるは昼夜といひどさぬぐにありて曲者を食談  
 むせしにの梶之助があるとい誰あるののもうりくれを曲者を  
 とらひしとてさうもわらむとて二日の日とてとて一第三日の日も

ちや西にうまきまれば九條門のころと心うらむ五つの年までをさして  
 わげさるふ之助の鶴鳥にさうさ妻の栢木の惱は打卧曲者の捕得ど  
 とうのさゆさるの因果明日はいらある憂目やえんと今日の日陰は  
 おのがさもつきて消ゆとあひあり九條門一間は閉籠又侍てさう  
 さまとて心づく大の残る野もさう食談さうささの曲者の志れさう  
 我運命の盡べさるのいささうん猶くこれと勘校るに鳩丸の  
 短刀詰りに扱さるるふ之助が腰より劔杖氏王の輿のうへは落  
 たりて疾とけあひさる夏もやある。そのわらとてさうが。とまれく  
 我君より賜りて我家にあり。劔とりて流土人の若君へ疾とあせ  
 さんば流命はつがなるとまはさる曲者のいささるにあらはし  
 其罪の逃さる謂う加えさる短気火性の我君さうささうさる



山中左門  
誣告の  
罪と得て  
自れを殺す



金三百五  
金五百元  
金千元  
金千五百元  
金千五百元  
金千五百元  
金千五百元  
金千五百元  
金千五百元  
金千五百元



耻とうけて今決めさるんもなむぢう。よさ此う六これまをの今と啼め  
 君より乞請来りし鳩丸の短刀にて腹切させりゆの尸譯多う。と獨  
 思案の骨と居。已は其心交度あつまごごことし。士の娘小君が母の  
 悩とを苦よみしと悲涙泣と見るにけ妻の事とを思ひなり我を  
 のらふさざりしと輪廻小絆ぐまのむぢう心も弱り氣も折けまを  
 涙に哽咽るるがうて最期もあがつるま家にあつては妨おし  
 菩提寺よりうてこそと彼鳩丸とのにけして懐中みしかり木  
 小君とをむぢし由良之進へも心の裏の暇をさし更にけとほけま  
 家と立出菩提寺としていそだり。かゝるを左法門が心中いふ悲  
 かりんちのうらるるのそもく山中左法門が菩提所の花裳山国字寺  
 と号する禅院にして左法門が家と去り一里あまると隔てし

花溪とよ所にわつ時の住持佛月禪師のその齡八旬は近く道徳の  
 實へのじくちて種々の奇特と見えぬ人皆活佛と稱依の  
 ののもおかしとみん左法門の此禪師と壇越の好みのとあつて和歌  
 の道とらてまどつるもむぢりなむわどに佛月禪師は對面して更の  
 仔細と物づり自殺と覚悟しる更とをばせぬを禪師涙と  
 むじとわくの詞もまどいどまむし思案の体ありしがどうも本堂の  
 壇越の男女老も若も打交りて百万遍の念仏を行ひて  
 禪家にはまもあつる更とをも此禪師の見識あるし禪師  
 百万遍の秘なる唱入るこゑのいとかりし  
 此所へ更と談をりしむぢうとあつて小院より  
 何更やわらんあつて譯き曉しぬ更とらてのら再左法門と伴ひて

本堂にいつろ彼百萬遍の檀越は打ゆふこれにどうする山中た清つと  
よびて當國松江の庄松江の判官秋幸どの長臣ある。さる人ありといはれも  
おふびあひつらん武士道のうちうらぐた夏ありとて當寺にきこつて貪道  
引導とつけ自殺とせんもの願ふるとさぬぐにさぬぐかどき兼引  
かえんべせんきんきん。おのくのやつらひあつらひのわづれども貧道  
このをれを此人のよめに其所て百萬遍と唱え菩提のよきごと  
あつてあつとつとつひくれべ壇越の人々目と目と見えぬ奥さるん  
がねにええたるが禪師の餘りさるのをれべせんさあびに兼引ぬされ  
とも腹切とえんへんきんきんきんきんきんきん一人立二人立暇もとど  
とて逃ぬるのめどおなりする。あつていさもこそとあつとあつと。さつと  
山中た清門へは月禪師の引導とつけどうするにどうして庭前の櫻の  
枝に鶯の鳴くれべ辞世をかかりく

枝に鶯の鳴くれべ辞世をかかりく

斯時高音来

此言

法

と打金とて猶えぐにえり一髪ふりとかいさつて。短冊とつと  
そええんへ妻へ遺物にをせぬましと禪師は託一腹切の所  
かゝりあつたを百萬遍の人ぐ左邊門と中央にありて達は居並び  
念珠の大きと引環一えんは月禪師高座にありて鉦打きト  
念仏と唱えあふりつて皆同音よとるえりたは門へ徐よとつと  
かゝりあつた片袖と引断してかの幡たとる緑色南无ありとつと  
のらとり小腹へぐらと突立まは鮮血うらと激りて畳と朱よとつと  
まじ鬘髪とれて苦痛の体此金とる修羅道とせよとつと  
禱急念仏皆目と開て畿同音よとにせよとつと唱は是を是と冥途乃

案内と一鮮血をさぐる短刀と持手にまゝと手とりちりちりして呪のまじりて  
撥切つ前に合破と倒れ臥し此山寺の入相に消てささくささく

第五回 顛狂

爰に又山中左衛門が妻の栢木の彼日家よ飯をて后病の床に打臥て  
一切物も食せども之助がととのと歎きのやみとそれを姑丸乃吉又よ  
つて左衛門が手に疑ひのまじりてささくささくの障ともささくささくを語り  
きをささくささくゆゑに其日も左衛門へ只所用わりて家にあささくささくの  
くくえ自殺せしとゆゑにささくささくささくささくささくささくささくささく  
之助がまじりてささくささくと小君に拳とひらきを嬬如に頭痛のりささく

居ささくささく由良之進あささくささく走來りて栢木に對ひ乃短刀乃  
変りて疑ひのまじりてささくささくと今まは月禪師より便僧とあり  
左衛門が自殺乃まじりてささくささくと辭世乃ささくささくと外に二品とささくささく  
ささくささく語り涙ささくささくとみ成のささくささくと左衛門が髻及  
自殺乃短刀とささくささくと栢木がまじりてささくささくと栢木へあささくささく  
えも泣きささくささくと髻とささくささくと目見しよりゆゆ音を  
ささくささくと啞咽ささくささくと倒れ伏しささくささくとささくささくと  
由良之進をささくささくと背を枕しつて介抱乃甲斐なり  
主人のささくささくとささくささくと油ささくささくと小君も顔よささくささくと  
ささくささくと泣きささくささくと栢木へ由良之進と推除てつとささくささくと  
〇おめでささくささくと花ささくささくと花ささくささくと志賀乃里ささくささくと殿か

沙馬よめしと三之助と壘れのせてそれくつのもつくと願狂しとい  
 むを由良之進打おさうん小君いふくころとつうのふ情あま  
 母うや心とつういふあへのみくと泣叫べ相木へ見えさすくと  
 縁と枕とつういふねんねこそい乃子りりう我子と愛と加あく  
 こころの髪乃青柳も心とともいふうもつうに止氣へまうらう  
 由良之進のうんざくと手にさうのびあつとともいふのまてひうら  
 へて心けうかづま泣居し小君にうらむい。やま嬢君俗にり  
 沙父上の沙辞世とす久○かあるとは高根丸ねに味うくさひこの  
 ちういふとつうのりたふし法りくわをむいたる沙水がまてえるよ  
 かつまうらの五文字と折句にわを法えきん何とかりして此字と墨つさ  
 めとせーへ氏王君に疾つり曲者と食議もつう無実の罪よ

あん腹めしとるかたきとちこれよと人よあつさぬとんざくの沙遺言  
 おんもつめしとる鳩尾と禪師とつうかろうましと夫と悟とつういふん  
 泣ておんを所いわらど心と男々くくりらあんと敵へ鬼神ありとも  
 沙助太刀つまつ御本望とどげせん嬢君いふと勇とれば小君も  
 とんざくと手にさうわげむ秘のあつとに哽咽つ由良之進うまきぞや  
 女もつも山中の冢子娘りや敵にのぞめく真如此とかの鳩尾と採しう  
 ちや片邊の琴とわのしとまれが系へ左右へ柱へ飛ち雁の群居る  
 川面へ箭と放つ如くあり由良之進打しうこびこの通の沙手のうら  
 知音の琴よひ死りえて鎌と復する松の琴勇しやく僕へこれしう  
 國字寺へ立越沙主人の沙死骸と葬る用意つまつり沙鼓へも夏  
 仔細と問えわけん沙つうしきい相木君しうく介抱しうあんと立上んと



三六助



山中左エ門  
の  
妻の  
楸木  
の  
怪  
を  
する



ゆいの木

タのん

むしとるうりく案内もろ組子の大勢席と踏うてくり来りやく  
 由良之進うけうぬい山中尤湯門自殺の次第國字寺より岡わけに  
 秋季公きこめし尤湯門自殺ありとこそ氏王丸へ疾つけにきまうつれ  
 うれが妻子とめしとて其罪とてとさんとおんいうりたげし死と花の方の  
 お情めて妻子の命のゆるさるし一か家の没収栢木小君由良之進の領所  
 の塚より追放ち當国の徘徊のゆじあひざるもの嚴命ありとて此家と  
 立さるべし否べ擲て持てのくん返答いりいと罵べ由良之進へありありも  
 よりど打おどろ死しが立張股一組子にゆひて平伏あり。やうこの  
 嚴命いさる違背つるまうらんさうあがらあべの間に。ゆいとうちけを  
 組子の首長のりや片時も有餘いふかぬ早く此家とわけしとせと  
 虎戒にわとまる權柄あり返を詞もあがりきれ栢木よりと告て

立の用意とてしむ心乱し栢木も年来倒のー我教と立  
 さるまのううんや。ゆいととてくへつとゆくどゆしてくれよ由良之進  
 堪忍せよと色と立て死とてうをせて泣くゆい目もあがりしと  
 ありさぬあり由良之進ありくれをしゆくさあ小君ありとも婢女  
 等に倡引せありとい尤湯門が遺物のまきぐと懐中あり至人乃  
 用金にしろく納置し百両と竊取て袖よりは霞耳へ水仕の女  
 までの死つて立をえんが組子の面く跡はつて領地の塚より  
 三人と追放てりもの道へ立ぬりぬさて由良之進召仕の男女は  
 汝等此所より伊暇あるべしとまは伊家立ぬり今の組子の内  
 首長とる兩人へ愁訟あり汝等が貯の品と乞請て心まるせに立の  
 べしとゆいえんべ年来召仕する者さゆい何国までも伊供し

追飯一主従僕二人を何方へや月とよせんと繋ぬ舟のありのありと  
 忙然とてくくくくぬ由良之進が家弟は簀作とよ者もあつて  
 浪人となり逢坂の関のほとりに住いすまを當國の徘徊とよ  
 らせし一男とよ 立奇づもあつど山中が親族とよ 秋季の怒は  
 觸ん事とよあつて寄もつりもあつど影もあつて由良之進  
 かまごりの相識とよとよとよ津の園へと志し風魔一栢木とよ  
 歳ともあつど小君とよとよて二里あつて謎り来り地獄ざりといふ  
 切所ゆぞさうりつる時といふ二更の頃とあつて遠寺の鐘声  
 幽にひびき涙といふとよとよとよ 朧月さく曇りざらして行路も  
 あつてつる溪の水音松吹風梢とよとよとよ 猿のこゑそのりびしきこと

心剛なる由良之進るべのに屈せど兩人を倡引て  
 地獄坂も半越来しとよ路の傍ある茂林のうらや七八人の山賊  
 わつしとよ路の真中に立塞り前にすじ賊由良之進と睡臥汝が  
 ふところの重げに足ゆるへ必定路金の貯わらん今惜へ置ておけと足弱連  
 と足のかさる詞とすて由良之進奴等に先とさうととと 逐答もあつて技打ふ  
 らしと斬る手練の早業前にさくみ山賊が首宙はうらやとし  
 轉くくと下り坂もらびゆたし栢木が目むき見つてくくく生首  
 と拾ひさう懐しとて莞く笑ひ。三之助とよ 戻りぞ父上もまらとよ  
 あつて二の目とあつぬ目とあつぬ。やのと月とよして打かたれ礎と  
 地上へ投捨てのうかたらしやと泣叫乱心の我母といふ小君がかなしと  
 つしとあつ所もあつりり由良之進の猶賊とよにわつりあひ勇と振て

戦いぞ小君の母の手とさうてを来り道へ立ちし松の木蔭は身を  
 かくし母とさして言うごとくあべいのかきぞあひびとる引て小君もぞ忍び  
 たる所より道とさして向の方に這入をうに遣はる夢みる里の  
 假屋のありつるがさうのわど四十あまの女非人假屋乃出づらふ  
 りつけたる無むしらと推搦げ面をかりさうとて光眼とせしむじ  
 栢木小君もぞ佇立しと打んやうて荒示とりし心のころふ點頭  
 居るく小石と探りさう打らうとさき布の緒も腐断する古甲の  
 鏝口と目かけ現の違ひを打つけしにえやツひての相置をん四五人の  
 女非人をも假屋のしらの小徑よりつと走りてと手揮してらうとせ  
 耳につけて耳語るん此者ども打らうと栢木小君もぞ居る後の  
 方へさうのさう詞もさうけと手さうめしとさうのさう狼書うらうと

くと率てゆれ多矣よ又由良之進の賊どもと追らし栢木小君が  
 ともさるとして大に周章二人が名とさうくともさうとさうやか  
 ともさうれども呼に答へ給研の更へ行方のもれざれ心ではしく胸とさう  
 二人がさのうもつらうともさう月も暗うてりのあやめもつらうと  
 ともさうれども便もさうりや打りしける山賊どもにむし行きさう  
 ともさうまへ伶利小君の里あうともさうらう便にあをを僕にさう  
 ともさうと別とさうさうとさうりかくあるさうに賊が跡と追つらう里あうとも  
 ともさうやとせせんかくやともさうひて西へ走東へを心迷しともさう  
 ともさう最前の女非人假屋のうらう立ち出づ由良之進と呼ともさうやと旗人の  
 ともさう殿二人連のか女中ともさうの迷ひもあやそれいさえわと此辻坐と九一過て  
 ともさう走めりが一定里へともさうらう今ともさう四五町あうともさう走めりあうともさう



かくわの道といふは人女子ありて  
 夜の道呼かりしやとてあひつら  
 多しといひと信しくりけしを  
 由良之進これとす欺りてとる  
 ちとどこえりてとてあひつら  
 安堵せり情の詞うとてとる  
 足りてとてあひつら女非人の跡見送  
 呼虚気な漢とて令笑ひとる  
 小奇といふは栢木小君とてとる  
 かの小経とて立りてとる○跡へ走る  
 一人の旅人最前の戦は由良之進が



かと一とる財布の紐と足にくり立  
 ともりて拾ひてとる○跡へ走る  
 ころやとてあひつらこのある金財布百兩余  
 の此大金するや此道にとどくと拾  
 財布と懐中より足とてとるやめてとる  
 かなぬ此旅人善人なる悪人なる  
 次の巻に載記するはとてとる

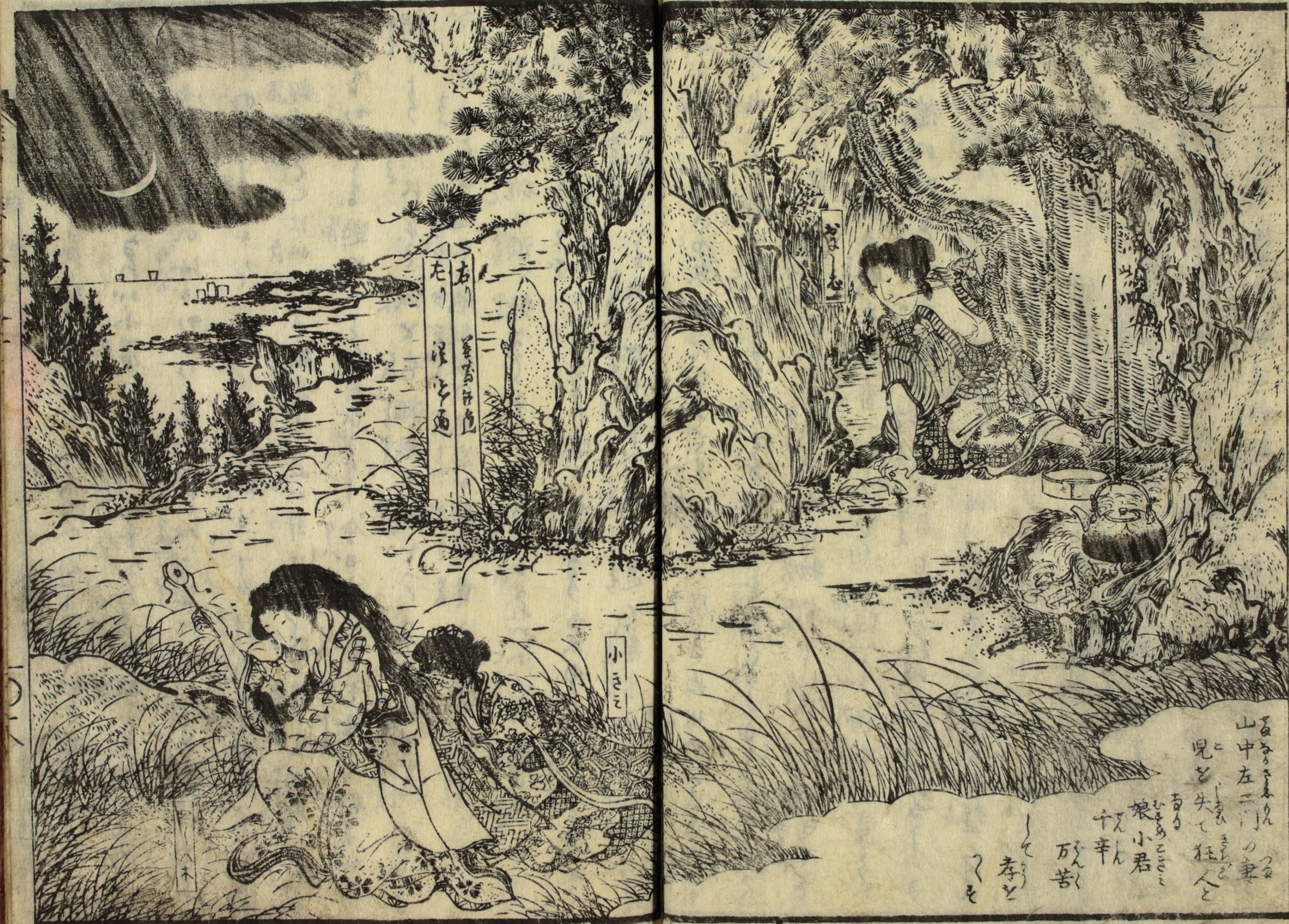
第六回 鳴琴

栢木小君とてとる女非人の名を  
 鬼芝とよびて地獄坂の谷陰に住居  
 多の女非人と集て其首長とる



昼へ手下の女どもと四方にめぐりて比丘尼順禮辻神子辻太夫のよひに  
 打扮せて銭とせ一日の食雑用其價とせめて貪取一銭少ても不足  
 のるそんわいしくむらうら夏地獄の鬼の餘鬼と責るが如くなんば阿芝  
 とり人名もわのぐく鬼芝とぞ呼みくる地獄坂の谷のけと鬼芝か  
 住居ありいと似やんしそれの去程に鬼芝の家の假屋とて谷陸の  
 住家にぬり出齒の葱と異名せし五十余りの女非人といふべしせ  
 栢木小君等が夏とてぐらにねぶぐらうらひよて空屋のうちに  
 縛りおれたるときてうち點頭缺火鉢は陶器の酒と燗をぐ  
 今日のおんあつるだるる雑用銭と改んて誰もく能精が出るうしそ  
 一銭も不足があらぬ鬼芝も毎日坂中の假屋に出で往來の人よ  
 銭をうぐ懐中行李に目ととどめ山賊もが犬とるるも畢竟への

奪る分口が慾さゆ名何にありても安く居まぬ世のうら明  
 まる精出して銭とせのサアくまらしてやとらくとやうけと  
 女ども囲炉裏の四圍に集り今日物乞いおの上話古本を  
 焚て鉄茶鐺煮る茶も花香へなうらう心悲べし栢木小君  
 出齒の葱に引とて鬼芝が面前に居らるる小君のまゝ  
 するせう如何ある者の住家ぞと怖くわらうと願まら壁くら  
 地板朽て何となく臭気鼻と襲ひ囲炉裏のところに居並  
 女原と見えぬ老うるもわり若さものをあやうの襪とせにま  
 髪へかどろとりてまて面垢づき髪をひらひて前齒は歯もわ  
 のうちに半アツるる米と探りて銭と換りてぐらもあり。瘡の膿汁  
 拭ひとりててててててててててててててててててててててて  
 拭ひとりててててててててててててててててててててててて



山中左二門の妻  
見と失て狂人と

娘小君  
十又辛ん

万苦

孝と

小きと

右 至宮戸道  
左 深谷道

木

うら瘵と吐くは薯蕷汁とまらぐ棄ててかひ嘔るもわらぐ  
 惣ら乞食の住家なれば小君へも胸のこころを詞も出さる里々  
 鬼芝小君にむかひはがかりにさるは汝が面に似かよふればさ  
 母もそのりつらんがかりの所にて居眠りする体気らふとこそま  
 つき親子をそに此所は捕まへし一井に陥るも暮も同前なれ  
 こそもかくても逃ぐるこそまらふがごとく今日より我乞食の群  
 明日より街にりて錢と乞雑用の錢とつひて長く此所はま  
 べ。也又それ又隨處の地獄坂の鬼芝が餘鬼責ませりつけ辛き憂め  
 わのまどと茶碗の酒と飲まざるまめさげふ云れば小君へ悲さ怖  
 打對いふ清が云如くこれあらん妻が母上よりおまのりて狂  
 非余に死し別家とも失て都のまんと心道と急者なれば慈悲  
 情こそまらひさうて何とぞゆしてはしめんと泣き云れば鬼芝へ小君泣き

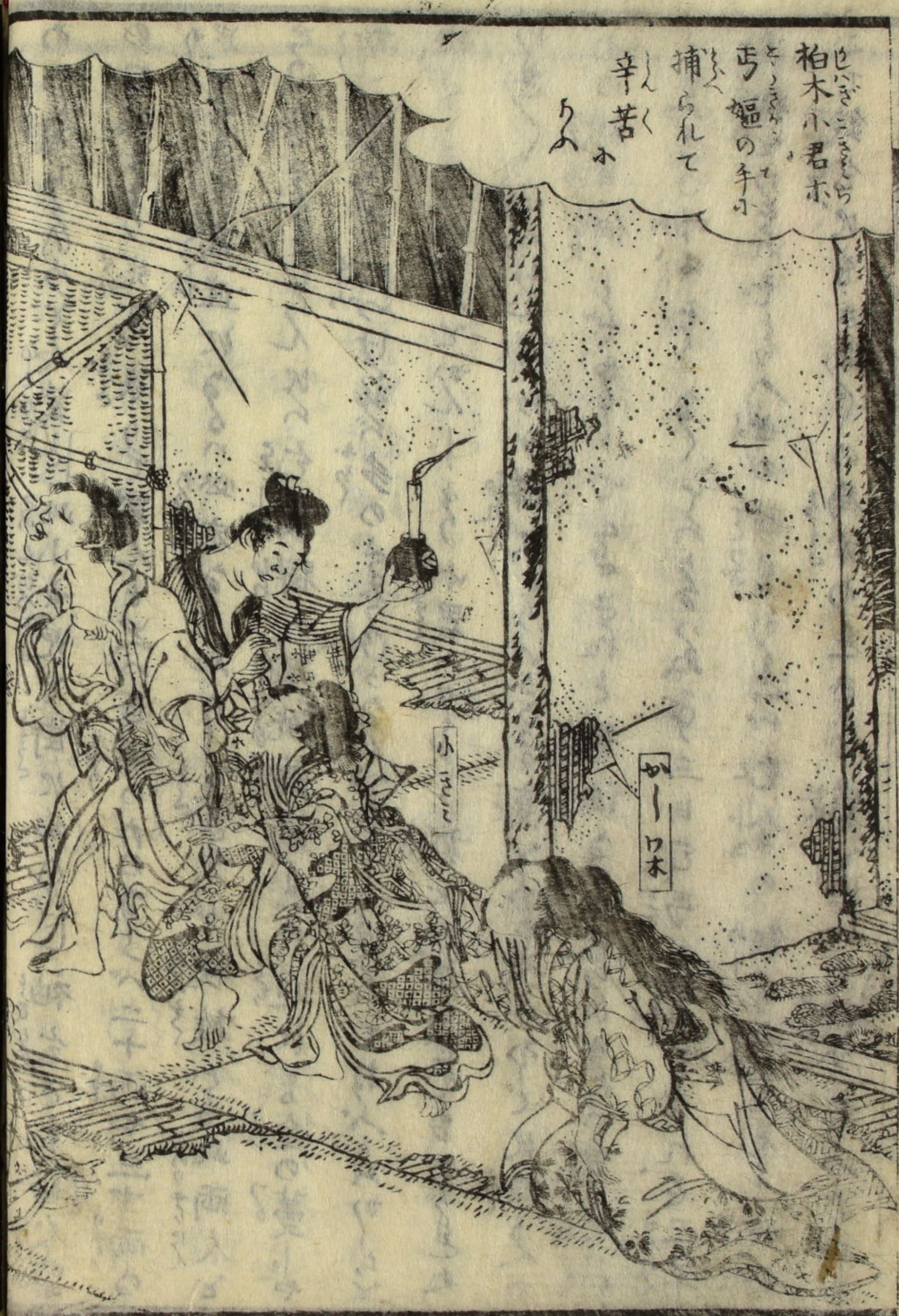
見てもおに打笑おひの情のよき日来わらうつと詞と云と定て栢木がふ  
 駭が掴もく眼の光にやんをか小君とつれて逃行人とらへくと手と  
 ころてをさぶさんとまらと出齒の秘ぶり立塞り栢木と突倒し  
 あぶかはいはしい風魔女ころん犬まか種りのそのまに一あひと喉に両手と  
 かけられ小君へのりてさうさうこれのうゆしてさうせんせと子どもの軟弱  
 かにて推傳んとまらなるにちよこさいをかと踏倒し已にわさる今の  
 鬼芝秘ぶりに声とみかれまて出齒よまごころの氣短にまとまか其  
 氣らふめり口とをせてい裏しつらん猿書は三寸繩其所の楹に縛り  
 おけとさうづにまをさぐるまた荒木柱の後手へ目もめてらさぬ形勢  
 あり小君いさがるくして母へのいと立しんが突のけらさる浪く

此所は...

〇十七

まゝ起上まゝに踏倒され。そらちかしの无念なと長袂とくわいのて  
 嗚咽して泣臥るる鬼芝秘ぶりと顔見ぬ。一年にも似ざる膽心ののこ  
 小女郎も伶俐する物の道理も曉させやそし汝我りみりとよす  
 され最前もよみ如く此所へ捕きての辞でも唯くでもりかかひ  
 如くにかゝして追つんでおくべきを乞食の群にかりて此ところよ  
 ぞまうとすべ母の命もつがな、繩目の今にもゆりてそをも辞唯々  
 返詞せいと又傾る茶碗の酒ゆるい色香もわつらんとおひり  
 目りも打凹と頬うたこけて鼻尖り色艶うせし顔色へ技よす  
 あり櫻樹の立枯しとるごとくあり出齒の秘ぶる鬼芝に打對ひ  
 見れば面もろくしく歳のかども十三三袖乞まをる惜まらるりの  
 人買にうりりさびとりの打けを鬼芝がそれとあつて習りら

のの氣ちかひめと人質に此小女兒と街にあひどし袖乞さされば人買  
 の目にもまろ先く来りて買んとすば百兩のりのさうば二十兩や三十兩の  
 足がつて高直にさるゝ必定うんり又きあが親族ども此兩人と  
 ちりかさんとらんば乞食群の足洗錢どぎの道にも金の蔓トや  
 斯くまじく心づけ秘多のさむみがるざうとりんてねぶるかいらと  
 探さくこのふうたとかんト多小君のやうく顔とのげのそせものごとぬ  
 りまじく二人あんなら群にのりいうる変ももささわどれ母との  
 あの繩目何とぞゆりてさされと哭泣がうれいのらんば鬼芝打  
 うらまの唯々とうりてさるるぬち三日乞馬の糸とされを三年  
 其樂とりをれむら入世の謗もあはぶ乞食の飯も喰て見よ我群  
 みて錢乞にもさぬぐの為方あはさも藝とじて錢と乞入りのん



柏木小君ホ  
捕られて  
辛苦  
り

六段 巻之二

かーワ木

小

三繪や四繪よりあぐるへ昔にまらぬ賤しうぬ汝が人品定て寛  
 藝がわらふ鼓うつら舞まはらふしに琴川字線くそれり人と問ひ  
 かけくさむ食非人とありさるへつらるる前世の因果ぞとまことむせ  
 久の海泣忍れまけぬ鬢鬢の男勝家鴨のやうにゆゆいゆゆい  
 小女児若痛目にぬぬうら藝がぬぐもやういふぬとやうやう  
 うと腰とうつけり摘らきて顔赤らきて痛と志のひかへゆきて  
 ませ藝とらみてゆゆゆる程のこらなれども母人にとしえらるし  
 筑紫琴と諸禮の折形花むきぶつりあぐるとゆゆいとまこわ  
 あまのにれれぬれぬも鬼芝へうらりゆい諸禮折形花むきびへ錢めらる  
 用いぬうぬいまじも琴とあづえし其月の幸ひ前の月瘧瘧ぞ  
 死ぶ小草が遺物の破琴義甲もまぢり合でめりたりゆい

弾せて見えその藝のうへゆいで錢貫つる所為違ふとさう不蓋  
 こころえて破し襖の納戸ようとうゆい古琴に柱画と琴甲と  
 とうそえて小君が前にうつけられ困ゆ裏のなりの女ども奥あ  
 夏にさひつ小君がめがけに居並ひて誇つ笑ひつ驚と鳥がわがめる  
 じりりあり小君へんとせんこもまき紙拭ひて引寄る片脚琴さる  
 趁跛琴柱画と脚に扶助し胸中逆柱にせりつ声と表よりなで  
 うもあはれぬ社のうらみぞどつれしき  
 といとこえにまきまらせが栢木へよと惘動で猿書と振解あるじや  
 うえがや腕も断るをまらせやと強縛せし荒縄は腕首と措中より  
 ろろろ鮮血滴りて簀子と朱に染るせり小君へ見るよりむせく

のむにまをせーううん母への縛とぞぞおしてあられとりど  
 鬼芝頭とやうのまぐき気のちがふるやうなれば容易縄目へや  
 泣面せどと琴とひけ弾ぬと母に痛めさきとと睡眈つけられてこゑ  
 おどかして ねまの糸乃はゆるふくそ  
 それくやしてかきんと せんばゆめん  
 七半各付  
 おもふけ  
 八半各付

栢木の涙とあひあなるはやくのりふらねむらめてうぶ小き  
 詠しそりぬりと母の縄目と才と惘動子の琴の緒に責られく  
 涙に湿る爪音もいそいそあをれにまこえなる  
 走る雪乃 七引をまっハ 十ハハまをま三三ハ  
 毛ぬきもに ねまの糸乃はゆるふくそ  
 鬼芝の戸とかけのりふらねむらめてうぶ小き  
 筑紫琴

明日う石山寺の境内にて草席の上に面と晒し琴とひきうく  
 銭貫へ田と汝と二人前の食雑用四緡の銭と鷹とと懲りの  
 小刀針辛き夏目にあのるぞこれ髯剃よ気らひか糸をこき  
 藪蔭の空家へ追入戸ごとと厳しくうめてかけの小児女、琴の手あま  
 手が頼てよんまりこへ来りて睨とうとていわれて小君へ又悔り胸を  
 冷して立ちぬると来とぬると叱らして怖づく側にうそへを  
 臭のきる織布に肥る臀の細帯へ似気く艶ある鹿乃子結  
 吃食の腰とつとく貴る小君を打ち無慙に又又恨く然る

鷺 談 傳 奇 桃 花 流 水 卷 之 二 終



